

人がことばを使うことの不思議

—発達過程からのアプローチ—

大伴 潔 東京学芸大学

要 旨：ほとんどの人にとって言語の発達は自然かつ迅速であり、生後数年で自由に会話ができる水準にまで達する。言語発達の流れを詳細に検討すると、乳児期の喃語において子音の種類が広がり、幼児期に細かい母音の区別を身につけていく過程で、自分が発する音声の聴覚的なフィードバックが重要であることが窺える。幼児期初期に語の音形が整い、動詞の語尾のレパートリーが増える過程においては、養育者とのかかわりが支えのひとつになっているらしい。このような言語の高次化を捉える観点を模索するなかで、ことばの多面性が見えてくる。初期の言語発達において、文法的な形態素を身につけていくことと、発話における文の長さの増加は相互に関連し、これらは言語発達の指標となり得る。幼児から学齢期にかけては、語彙や文法、談話、あるいは、理解と表出といった複数の側面からことばの発達を評価できる。アセスメントによって得られた言語発達のプロフィールは、支援の方向性を決める手がかりとなるであろう。

Key Words： 言語，発声発語，コミュニケーション，発達，アセスメント

I. はじめに

ほとんどの人は、ことばの理解や表現に困ったという幼少期の経験は記憶になく、生後数年で自由に会話ができる水準にまで達する。それほど言語の発達は自然かつ迅速である。ヒト以外でも音声を聞き分けたり、意味のある身体表現や発声を行ったりする種はあるが、ヒトだけが類を見ない複雑さのある言語を操り、知らず知らずのうちに会話ができるまでに至るというのは不思議なことである。一方で、言語やコミュニケーションに困難があり、生活や他者とのかかわり、学習に影響を受けている人も多い。言語・コミュニケーションの本質に迫ることが、ことばに難しさのある人の理解や、適切な支援のあり方の検討につながるのではないか。

II. 乳幼児期の発声・構音の発達

意味のあることばを話し始める前から、乳児は声を出し、次第に子音と母音からなる音節が

連なるようになる。このような喃語の発達において、重度の聴覚障害のある乳児と、健聴の乳児はほぼ同時期に自発的な音声を産出し始める。しかし、これらの群を定期的に追っていたところ、健聴児は子音のレパートリーが増加していくのに対し、聴覚障害のある乳児では増加が見られず、むしろ徐々に減少する過程が明らかになった¹³⁾。このことから、発声行動の出現は生得的に備わっているらしいこと、また、自らの発声が聴覚的にフィードバックされることで、音節のレパートリーが広がるという聴力の働きがあることが示された。

乳児のランダムにも見える発声は、次第に日本語らしさ、英語らしさを帯びてくる。英語には、日本語にはない l と r の区別があるなど、発音の難しさが指摘されるが、母音の種類も多い。日本語でイと表記される音には英語では [i] (hit) と [i] (heat) があり、英語の [a] と [æ] は日本語ではアと表記される。英語圏で育つ子どもはどのようにその微妙な区別を身につけていくのであろうか。22 か月から 30 か月までの母音のレパートリーの広がり方を縦断的に検討したところ、中核となる母音 [i] や [a]

などが早期に獲得された後、より精緻な[i]-[I]や[a]-[æ]などの対立へと進展する過程が明らかになった¹⁰⁾。母音の体系の確立には、まず発音しやすい基本的な母音が定着し、それを軸にして言語環境に合致した母音へと調整されることが示された。聴覚的なフィードバックをもとに構音運動のコントロールが確立していく過程があることが窺える。

● Ⅲ. 養育者とのかかわりのなかで育つ言語

喃語の時期から語彙を獲得する言語期に乳児が移行していくと、音節のつながりも意味のあることばに聞こえるようになる。このプロセスに養育者は何らかの関与をしているのだろうか。ことばを獲得する前後である12か月から21か月までの3名の子どもの母親との言語的やり取りを縦断的に分析したところ、母親は子どもの明らかな有意義語と、有意義語と理解されそうな不明瞭な発話に回答する傾向があり、不明瞭な発話には、適切な音形に直して聞かせている⁶⁾。音形が定まらない子どもの過渡的な発話には、母親は子どもの意図を汲みつつ、より正確な音形で返しており、ここにはコミュニケーションを維持しようとする母親の意図が反映しているのであろう。このような語のモデル提示は、子どものより適切な発音への修正に貢献していると考えられる。

大人とのかことばによるやり取りは、その後の子どもの言語表現の広がりにもどのように関与するのだろうか。日本語の動詞は、「食べる」「食べて」「食べよう」など多様な語尾の形を取り、話者の思いを伝える。家庭での発話の縦断的データを分析すると、相手への要求を伝える表現にも「見て」という直接的な表現から、「見たら」という誘いかけ、「見てください」という丁寧な表現へと広がる順序性が認められた。さらにその順序性は母親が子どもにことばかけを行う際の語尾の使用頻度と関連することが明らかになった⁹⁾。遊びや生活の文脈において母親と子どもの双方が共通する意図をもって相互にかかわるなかで、その意図を表す母親の語尾形が子どもへのモデル提示になり、徐々に子どもの表現が広がっていく可能性が示唆された。

● Ⅳ. 文が複雑化する過程の検討

言語は上述の動詞の語尾形態素のほかにも、疑問詞、格助詞など多様な側面がある。このような語彙や文法面の発達においても順序性はあるのだろうか。2歳から5歳までの子どもの発話サンプルのデータベースを分析したところ、発達の早い子どもと比較的遅い子どもの間に獲得時期の個人差は大きい、概ね同じ順序で獲得される形態素が多いことも分かった。そこで、遅く獲得される形態素ほどより高次のレベルにあると想定して重みづけを行い、子どもの発話に含まれる形態素の種類ごとに加点をする発達指標(DSSJ)を提案した³⁾。

ことばの発達が進むほど、ひとつの文を構成する語の数も多くなっていく。これに着目した言語発達指標に平均発話長(MLU)がある。格助詞「が」のような文法的助詞や、先述の動詞の語尾形態素の種類は、MLUとどのように関連するのであろうか。定型発達幼児の発話データベースを用いて検討したところ、助詞や語尾形態素の種類数とMLUは一定水準まで対応することが明らかになった⁴⁾。知的障害のある幼児・児童の発話においても、文の長さやDSSJの得点との関連が認められ、知的発達水準にかかわらず、同様の傾向があると言える⁵⁾。

● Ⅴ. 発達のリスクのある子どもの言語

ことばの発達に関するリスク要因のひとつに低出生体重があり、低出生体重児では認知や言語の発達が遅れることが知られている。詳細を調べるため、12・24・36か月時点での認知・言語能力を評価する質問紙を各年齢約30名の母親に記入してもらった。正産児との比較から、低出生体重児は12か月時点で音への反応、指示理解、自発的コミュニケーションに遅れが見られ、24か月時では声やことばの模倣、表出語彙、2語文・3語文の形成にも遅れを示すことが明らかになった¹²⁾。5歳の出生体重1000g未満の超低出生体重児では、自発話のMLUの観点からも統語面の遅れが示された¹¹⁾。

● VI. 言語・コミュニケーション発達の アセスメントから支援へ

これまで述べてきた研究は、言語の特定の側面に焦点を当てたものが多い。しかし、ことばは語彙や文法(統語)の領域だけでなく、ひとつのトピックについて複数の文をつなげて表現したり、連続する文を理解したりする談話や、語や文を対人文脈の中で使用するコミュニケーション(語用)の領域もある。さらに、ことばは表出と理解の2つの観点から特徴づけることもでき、これらは必ずしも均一に進展するわけではない。したがって、ことばの発達の個性を明らかにするには、多面的にアプローチする必要がある。そこで、言語発達支援を視野に入れたアセスメントツールとしてLCスケール(言語・コミュニケーション発達スケール)を開発した⁸⁾。言語発達の初期段階を対象としたLCスケールでは、語彙、語連鎖・統語、談話等の領域について、言語表出、言語理解、コミュニケーションから総合的に評価する。LC年齢やLC指数という発達指標のほか、発達状況を領域ごとのプロフィールとして示すことができる。

アセスメントのニーズは通常の学級で学ぶ児童にもある。特別支援教育では、ことばに課題のある児童の一部に通級による指導が行われている。これらの児童に対する指導目標の設定に資する情報を得ることができるよう、LCSA(学齢版言語・コミュニケーション発達スケール)も開発した⁹⁾。文や文章の聴覚的理解、語彙や定型句の知識、発話表現、発想の柔軟性、文章の音読や理解にかかわる10の下位検査から評価する。全体の発達指標であるLCSA指数や、下位検査ごとの評価点から、言語発達のバランスに関するプロフィールを得ることができるよう配慮した。

● VII. 今後の課題

言語発達の全体像について調べるほど、ことばの多面性が明らかになり、各側面ともに奥深さがある。話し方や人との接し方に個人差が見られるように、ことばの発達にも個性があり、発達の支援を行う際にはその個性を把握し、尊重することが重要ではないだろうか。

言語やコミュニケーションの困難は社会参加にも影響を与えるという点で、生活の質(QOL)の低下をもたらす一因となる。幼児期の言語発達の遅れは、9歳の時点でのQOLを低下させ²⁾、青年期以降においても行動面や情緒・社会性において課題を生じるリスクが高いことが報告されている¹⁾。支援の方針を定める礎となることから、アセスメント結果の活用の仕方をさらに精緻化していくとともに、ことばへの介入によってその後の生活の質がどのように改善するのかについて今後明らかにしていく必要がある。

● VIII. 本号の特集論文について

発達障害支援システム学研究の本号は、言語やコミュニケーション、発達支援に関連する論文の特集号でもある。

溝江氏は、乳幼児期の子どもと養育者との相互的なかわりに焦点を当て、特に共同注意(二者が同じ事物に注意を向けること)と言語の発達について概観している。このような知見が、早期からの言語やコミュニケーションへの支援のあり方に示唆を与えることを論じている。

竹尾氏は、知的障害児の発達について言語領域、発話領域、コミュニケーション領域、読み書き領域ごとに概観し、知的障害児を対象とした支援のあり方について考察している。

地域の発達支援にかかわる小林氏は、親子を対象とした自治体の発達支援事業を紹介するとともに、独自の調査から保護者のニーズを整理し、現状と課題について論じている。

発達障害やその傾向のある若者を支援する綿貫氏は、人の多様性を尊重するニューロダイバーシティの理念を紹介するとともに、その理念に基づく事業への参加者の思いから、このような取組みの意義について論じている。

ことばは心の窓でもあり、人と人をつなぐ媒介でもある。各執筆者の観点から開かれる世界が多くの人に共有されることを願う。

文 献

- 1) Conti-Ramsden, G., Mok, P.L., Pickles, A. and Durkin, K. (2013): Adolescents with a history of specific language impairment(SLI): strengths and difficulties in social, emotional and behavioral functioning. *Research in Developmental Disabilities*, 34, 4161-4169.

- 2) Eadie, P., Conway, L., Hallenstein, B., Mensah, F., McKean, C. and Reilly, S. (2018): Quality of life in children with developmental language disorder. *International Journal of Language and Communication Disorders*, 53(4), 799-810.
- 3) Miyata, S., MacWhinney, B., Otomo, K. et al. (2013): Developmental Sentence Scoring for Japanese. *First Language*, 33, 200-216.
- 4) 宮田 Susanne・大伴潔 (2020): 平均発話長 (MLU) から捉えた日本語の初期文法発達—自立語付属語 MLU を指標として—. *言語聴覚研究*, 17(2), 87-95.
- 5) 宮田 Susanne・大伴潔・西澤弘行 (2005): 自発話分析による新しい言語発達指標 (DSSJ) の検討—知的障害児と健常児の発話サンプルへの適用—. *医療福祉研究*, 1(1), 8-23.
- 6) Otomo, K. (2001): Maternal responses to word approximations in Japanese children's transition to language. *Journal of Child Language*, 28, 29-57.
- 7) 大伴潔・林安紀子・橋本創一・池田一成・菅野敦 (2012): *LCSA (学齢版言語・コミュニケーション発達スケール)*. 学苑社.
- 8) 大伴潔・林安紀子・橋本創一・池田一成・菅野敦 (2013): *言語・コミュニケーション発達スケール (LC スケール) 増補版*. 学苑社.
- 9) 大伴潔・宮田 Susanne・白井恭弘 (2015): 動詞の語尾形態素の獲得過程: 獲得の順序性と母親からの言語的入力との関連性. *発達心理学研究*, 26(3), 197-209.
- 10) Otomo, K. and Stoel-Gammon, C. (1992): The acquisition of unrounded vowels in English. *Journal of Speech and Hearing Research*, 35(3), 604-616.
- 11) 大伴潔・若葉陽子・奈良隆寛 (1998): 超低出生体重児と正常産健常児の5歳時における言語能力—言語検査と自発話分析による検討—. *音声言語医学*, 39(1)24-33.
- 12) 大伴潔・若葉陽子・高橋道子・三科潤 (2002): 低出生体重児および正常産健常児における言語発達—言語能力発達質問紙による12・24・36か月時での比較検討—. *音声言語医学*, 43(2)160-172.
- 13) Stoel-Gammon, C. and Otomo, K. (1986): Babbling development of hearing-impaired and normally hearing subjects. *Journal of Speech and Hearing Disorders*, 51(1), 33-41.